

葦ハ崎の民話劇

第一集

1001

茅ヶ崎市立図書館



0113647580

籍

- | | | | |
|----|--------------|----|---------|
| 1 | カーゴ地蔵 | 21 | 八大龍王 |
| 2 | えび地蔵 | 22 | えび対講 |
| 3 | 車地蔵 | 23 | 沼澤祭のまじり |
| 4 | 舟地蔵 | 24 | いぼとり地蔵 |
| 5 | 伊勢神宮の道標 | 25 | 女籠が石 |
| 6 | 明神井戸 | | |
| 7 | 新田と平太夫 | | |
| 8 | 萩原の花女街道 | | |
| 9 | ありがとうキヤーキアさん | | |
| 10 | 番付農民伝 三浦勘助郎 | | |
| 11 | 七堂山麓 | | |
| 12 | 甘沼のきつね | | |
| 13 | 堤の石御前 | | |
| 14 | 赤沼屋のタヌキ塚 | | |
| 15 | 室田の石火 | | |
| 16 | 狐を七かした角屋 | | |
| 17 | オチヨボんば | | |
| 18 | 和合の和富屋 | | |
| 19 | 南郷が丸 | | |
| 20 | 地蔵地蔵 | | |



まえがき

有志による「茅ヶ崎民話の会」が平成十年四月に歩き始めてから九年、ささやかな活動の中で『茅ヶ崎の民話劇第一集』がまとまりました。

これらの民話は、茅ヶ崎に住む人々の耳から口へと語り継がれてきたものです。冬のいりり端で赤く燃える火を囲んでお年寄りが幼い子供達に語ったことでしょうか。一つのお話には私たちと同じような庶民の夢や、希望、喜びや悲しみなどが込められ人情が伝わってきます。伝説から史実が解明される例もあります。

私たち民話の会の仲間は茅ヶ崎に伝わる民話について古老に話を聞いたり文献と照らし合わせたりしてきました。そして小野間正（故人）を中心に脚色したものを民話劇にして「語り部」として心をこめて皆さんに紹介してきました。

民話は地域の財産なのです。今、時代が変わり、これらの伝承文化は忘れられようとしています。この小冊子を手にした方々から私たちの思いがさらに多くの人々に伝わり広がっていくことを心から願ってやみません。

目次

・赤羽根のタヌキ塚	5
・甘沼のきつね	11
・ありがとうギヤーギばあさん	16
・いぼとり地藏	22
・姥島物語	27
・えな塚物語	32
・えびす講	37
・オチヨばんば	41
・香川義民伝 三橋勘重郎	46
・かっぱ徳利	52
・狐を化かした魚屋	60
・車地藏	66

・七堂伽藍	73
・新田の平太夫	83
・清明井戸	89
・堤の巴御前	95
・南郷力丸	100
・なんどき橋の幽霊	105
・萩園の花女郎道	111
・八大龍王	117
・浜降祭の始まり	123
・弁慶塚物語	129
・室田の花火	134
・女護が石	141
・和合の稻荷様	147

赤羽根のタヌキ塚

ナレーター

赤羽根は、大山街道に沿って東西に細長く広がっています。裏手は丘陵の斜面に沢山の樹木が茂っていました。そこにはキツネ、タヌキ、イタチ等の獣や、キジ、カラス等の鳥が住んでいました。崖の一部の小砂利の地層は、十四万年も前の地層ともいわれています。

元禄時代の初めのころ、赤羽根に満蔵寺というお寺がありました。住職は心の優しい人でしたので村人から慕われ、小鳥やうさぎ、犬、猫などの動物たちも自然に住み着き、山すその淋しいお寺もいつも明るく賑やかでした。ある夜のこと、一人の若い娘が、

娘

「こんばんわ、今晚は。暗くて道に迷ってしまいました。一晩泊めてください。」

和尚

「それはそれは、お困りでしょう。さあさあ お上がりなさい。」

ナレーター

住職は火の燃えている囲炉裏の傍に案内し、暖かい食事を進めました。

娘

「とてもおいしいものばかり、こ馳走様でした。ところで、和尚さんは一人でお暮らしますか。」

和尚

「いや、私は一人ではありません。いろいろの小鳥や動物と暮らしています。」

ナレーター

こんなことがあってから、美しい娘は夜になるとお寺へ来て、和尚さんと食事をしたり、話をしたりして夜更けてかえって行くようになりました。

村人1

「ようようこの頃、夜になるとお寺に若い娘が来るけれど、ここらでは見掛けない娘だなあ。」

村人2

「和尚さんも男だから、若い子に心引かれていいるのかなあ。」

村人1

「ここらに悪いタヌキが来るようになったというから化かされていなければいいけどなあ。」

ナレーター

村の人たちも顔を合わせるとこんな話をするようになりました。

今日は年に一度の村祭り。夜になっても祭りばやしが賑やかです。娘も着飾ってやってきました。

和尚

「さあ、今日はお祭りの話だよ。賑やかな笛や太鼓の音が聞こえてくるじゃないか。ホラ！　聞こえるだろう。」

この秋祭りというのは、毎日汗水流して真面目に働いたかいがあって、今年も豊作だったと、お百姓さんが一年に一度仕事を休んで神様に感謝し、共に喜びをわかちあうための、めでたい日なんだよ。」

ナレーター

和尚さんは、苦しかったこと、つらかったことも、この祭り囃子が鳴り始めると、身も心もすっかり和やかにになって、収穫の喜びに変わるといふようなことを話して聞かせました。

娘は話を聞き終わると、祭り囃子に合わせて身振り手振りよろしく踊り、和尚さんを喜ばせました。

そのうちに、歌い出しました。

娘

「満、満、満蔵寺、満蔵寺の庭は、つん、つん、月夜だ、みんな出て来い、来い、来い。おいらの友だちやボンポポンのボン。」

和尚

「オー、うまいもんじゃ。」

ナレーター

それからと言うもの、秋の夜長を二人の会話がいつまでも続くようになりました。

和尚

「私は話をするのが商売のようなもんだが、あんたの話もとっても面白い。話上手は聞き上手といってな、人の話はよく聞くもんじゃ、話を聞けるあんたはとっても偉いぞ。」

娘

「はい、和尚さん、よくわかりました。」

和尚

「そうそう、あんたは、この辺りに悪いタヌキがいて、村人に迷惑をかけているのを知っているかい。困ったものじゃ。」

娘

「えー、それじゃ和尚さん、今晚もいいお話を有り難うございました。」

おやすみなさい。」

と、言つて帰りにかけた娘の後ろ姿に着物の裾からタヌキのシツポが出てくるのを見ました。

和尚さんはビツクリすると共に、淋しい気持ちにさせられました。

和尚 「あんなにきれいな娘がタヌキであつたとは、トホ……。」

ナレーター 次の夜も娘はシツポを和尚さんに見られたとも知らずに訪ねてきました。

娘 「今晚は！ 和尚さん上がります。」

和尚 「待つていましたよ。今日は村の人に頂いたお芋を焼きましたよ。

サア、こちらへきておすわり。」

ナレーター と言つて、娘がすわると囲炉裏の中で焼いておいた火箸をタヌキの大風呂敷へつけたからたまりません。

タヌキ 「ギヤ、たまげた。」

ナレーター 悲鳴をあげてタヌキの姿になって逃げていきました。
翌朝和尚さんがお勤めをしていると。

村人2 「おはようございます。和尚さん、和尚さん。」

和尚 「はい、はい。お早うございます。どうしました、大声を出して。」

村人2 「朝作りに行こうと思つたら境内の隅にタヌキが死んでいるんでさあ。」

和尚 「それはそれは、知らせてくれて有り難う。どれどれ。」

ナレーター 和尚さんは草履を履いてタヌキの所へ行きました。

和尚 「殺すつもりはなかったのに、可哀相なことをした。ケモノといえども秋の夜長の楽しかったこと……。」

ナレーター 和尚さんは境内の隅にタヌキのお墓をつくりました。これがタヌキ塚です。時は移り、満蔵寺は廃寺となり、檀家は菱沼の長福寺、赤羽根の西光寺、円蔵の輪光寺、十間坂の円蔵寺にうつりました。

広かつた満蔵寺の境内は、村人により開墾され畑や田圃になりました。赤羽根の城田立範さんのご先祖が、小砂利の敷き詰められた丸い小さな塚らしき所に鉢を入れると、その晩から体調が悪くなつてしまいました。

ある夜、枕元にタヌキが現れ「頭が痛い、もっと広いところに行きたい。」と言つて去りました。

翌日、タヌキに言われた通り塚を日当たりの良い所へ移しました。すると、うそのように体調も良くなりました。

その場所が、新湘南バイパスの側道にかかることになり、現在は城田立範

さんの宅地の中に移されました。

塚には名前がなく、「無名塚」となっています。枕元に来たタヌキに、『何という名を刻んだら良いか?』と聞きましたところ『名前など要らない』と言ったそうです。

ある年の夏、灯のともっているお盆の提灯が風に吹かれて家の軒先に燃え移ってしまいました。が、大事にはならず、ボヤで済みました。家族は、『これは狸が守ってくれたのだ』『家の守り神だ。』と手厚く祀りました。

それから、毎年一月の日曜日に長福寺の和尚さんに『ご供養して頂いているそうです。』

一刃影りのタヌキの像が今も城田家の床の間に飾られています。赤羽根には、タヌキが沢山居たそうで別の話もあるようです。



甘沼のきつね

ナレーター

茅ヶ崎の甘沼村は南に面した平地に田や畑が広がり、北の方は茅ヶ崎の海が一目で見渡せる高い山が続き、生い茂った樹木を巢にしてキツネ、タヌキ、兎、鳥などがすんでいました。

山や野に食べ物が少なくなると里に出て農作物を荒らすものもいて、村人は困っていました。だんだんとひどくなってくるので村人は集まってどうしたものかと相談しました。

村人1 「昨日は、ニワトリをやられちゃったんだ。」

村人2 「一番悪いのはキツネだんべーな。」

村人3 「どうとう屋敷へまで来るようになりやあがったか。」

村人女 「そうなんだよう。キツネのやつずうずうしいたらねえんだから。」

村人2 「人をなめんにもほどがあらあ。」

村人4 「わなを仕掛けてとつつかめえちまべえかよ。」

村人2 「どうだろう、いっそのこと毒ダango食わっしちまうかよ。」

村人3 「おお、それがいいや、そんならいっぺんに退治しちゃべーかよ。」

村人女 「でもよう、キツネでなく他のけだもんが食って死んだらかえーそうだしなあ。」

村人1 「いっそのこと、鉄砲うちを頼んで、鉄砲でドカーンとやっちまべーかよ。」

村人4 「さてよ、キツネはお稲荷さんのお使えだし、そんなことして何かたたりでもあつたらなあ。」

村人3 「たたりかあ、ウワァー、くわばらくわばら。毒ダンゴも、鉄砲もやつぱりだめだ。」

村人女 「そりやあ、殺してやりてえくれえ憎らしいけど……。なんだかそれもふびんだし……。そこで逆の考え方をしたらどうだろうな。ひもじいから悪いことをするようになんべえから、腹のたしになんものをちつとつでもやるようにしたらどうだろうかと思うんだがな。」

村人1 「そんなことして甘やかしたら、ますますつけあがるんじやねえかなあ。」

村人女 「そうゆうしんべえもある訳なのよう。でも荒らすのはキツネがおもだと思ふのよう。だからさあ、物日とか、お祝いや不祝儀、そういうとき油揚げを庭先へおいてやんとか。また畑のけえりには、できたものの内からちつとでも道端へ置いてきてやんとかしてやったらどうだろうな。」

村人2 「フーン、なるほどなあ。」

村人4 「そういう手もあんなあ。」

村人女 「キツネって感がいいから、きつとわたしらの気持ちが通ずると思うだがない。」

村人2 「そんなことやつちに解るかなあ。」

村人3 「こういう心づけえがけえつて良い結果になんかもしれねえ。」

村人1 「まあ、とにかく、ききめがあんかどうか、おかねさんのいうことを試しにやってみよう。」

ナレーター

ということに村人の相談はまとまり、取れた作物の一部を道端において帰ることに決まりました。その後しばらくは、いたづらが続きましたがいつとはなしに被害が少なくなってきたようです。

この辺りには殿山、丸山、根上山などいろいろな山があり、丸山のお光ギツネ、根上山のお園ギツネなどリーダー格のきつねがおりました。

ある日、そのキツネたちも集まって相談をしたのです。

「ねえみんな、今話した通り嬉しいじゃあないの。この頃村人は、いろいろと食べ物を残していつてくれるなんて、だから畑を荒らさないようにしなくては……。」

「充分とはいえないけど、村人の心づかいをありがたく思って、里へ出て悪いことはしないように気をつけようね。」

「なるべく山にあるもので間に合わせ、村には迷惑をかけないようにしたいと思うわ。」

「田んぼでたにし、いなご、小魚など今迄のようにとる分にはいいと思のよ。」

ナレーター

村人の気持ちがいいあんばいに動物たちに伝わったのでした。

こうしたことから甘沼では鎮守様の祭礼の日には、山の動物たちも浮かれ出すほど和やかな村になりました。

今日は祭りの日、太鼓も聞こえます。相州のキツネ達も集まっているようです。

村人女

「今日は村のお祭だあ。」

村人2

「今年は麦も出来がよかったし、いい祭りになりそうだなあ。」

ナレーター

鎮守様の境内では、演芸も始まり大勢の村人でにぎわっています。

お園ギツネ

「さあさあ、私たちも仲間に入れてもらってここで踊りを披露しようよ。」

「みんな、早く早く。」

ナレーター

夜も更けて、祭りも終わりました。村にはまた平穏な暮らしが続きました。しかしある年のこと、そんなこととは知らない近郷に住む猟師が、里へ降りてきたギツネを撃ち殺してしまうという事件がおきてしまいました。思いがけないこのことはギツネたちをすっかり怒らせてしまいました。

お光ギツネ

「だから人間のすることなど信用できないんだ。あんなうまいことをしておいて、それをうのみにしたのがいけないかった。ああーくやしい、くやしい。許せない！この恨みはきつと晴らしてやるから！」

お園ギツネ

「そうよ、まんまと私たちを騙したのよ！もう二度と人間のすることは信じない！この仕返しができるようなものか、私たちの呪いがいかに恐ろしいものか必ず思い知らせてやる。」

ナレーター

一夜あけると、畑の作物は踏み荒らされてみる陰もなく、村人も寄るとさわると奇妙な話をするありさまです。

村人1

「昨日おかねさんに会ったら、目が座っちゃって、ボーツとして、あいさつしたのに気がつかったよう。」

村人4

「二三日ばかり夜中にだれかが戸を叩くんで出てみると、だれもいねえんだよ。」

村人1

「ギツネの祟りかあ……。」

「そお言やあ、長吉つあんは暗くなって帰ってきたら、いつも歩いている所なのに、道が解らなくなってるぐるぐる一晩中歩いていたんだとよう。」

村人4

「山の裾に、ポー、ポーと明かりがついたり消えたりしているのを見たよう。」

村人3

「おお、怖っ、やっぱ祟りかあ。」

ナレーター

ギツネたちの怒りは激しかった。

おびえきった村人は撃たれたギツネの霊を慰めようと鎮守様の境内へ稲荷様を建てて供養しましたので、恐ろしいことも次第におさまり村には再び穏やかな暮らしが戻ってきました。

稲荷様は、現在甘沼八幡大神にあります。長い年月のため荒れ果てて社のみとなっていますが、長い信仰は続けられています。



ありがとう ギャーギばあさん

ナレーター

今から四百年程昔、武田勝頼が戦いに敗れ、その家臣が今宿や中島に落ちのびて来て、永く住むようになりました。その中の女性が医者として病気の治療に尽くし村人に感謝されたお話です。

戦国時代、甲斐の国を支配する大名、武田勝頼の家来に土屋惣蔵昌恒と言う強い武将がいました。この武將に、医者として仕える想庵という人がいました。まだ若い名医と称されていました。想庵の夫人英子も医学を勉強した立派な医者でした。

或る時、想庵は英子に、

想庵

「近い内に合戦が起きるような気がする。戦いに勝つも負けるも時の運、いずれにしても、わしは土屋様の医者である。いざとなれば、殿と運命を共にする覚悟である。どのような事態になろうとも、心乱してはならない。」

英子
想庵

「縁起でもございませぬ、そのようなことを。」

「いや、万が一と云うことがある。是非、そなたに頼んでおきたいことがある。それは、殿のこ子息、未だ五才の昌太郎様を連れて甲斐の国から逃れてもらいたいのだ。」

英子
想庵

「旦那様がそこまで考えて居られるとは……、では愈々合戦が……。」

「それにそなたは医術にすぐれている。その上、靈感の修行も積んである。どうか昌太郎様と落ちのびてくれ。その上、病に苦しむ人々のために尽くしてもらいたい。」

「てもらいたい。」

英子

「昌太郎様のことは兎も角、旦那様を捨てて私だけが生き延びるとは……。」

想庵

「これも戦国のならい、是非もないことじゃ。落ち行く先だが、相模の国、今宿村に武田家ゆかりの寺があると。甲斐の国からは遠方だが、むしろそのほうが安全であろう。」

ナレーター

果たしてまもなく、天正十年（一五七三）武田方は織田、徳川連合軍の攻撃を受けて、武田勝頼は天目山で悲壮の最期を遂げました。

土屋惣蔵昌恒も討死、想庵も殉職してしまいました。

想庵の妻英子は、幼い昌太郎を連れ、相模の国をめざして、野山を越えて厳しい旅を続けることになりました。武田方の落人に対する追っ手が来ましたが、幸いにも捕えられないことなく今宿村にたどり着きました。

ところが旅の疲れが出たのか、昌太郎はしきりと咳をするようになりました。木陰に連れて行き、

英子

「昌太郎様、横におなりなされ、お疲れになったでしょう。」

昌太郎

「父さま、母さま、喉が痛い、痛い。」

英子

「喉をおさすりしましょう。我慢なさるのです。」

ナレーター

そう言い聞かせ喉をさすりながら、「ギャーギ、ギャーギ。」と唱えました。これは病氣治療修行で会得した一種のまじないでした。不思議にも昌太

郎の咳も止まりのどの痛みも取れました。

英子 「昌太郎様、私はここに居りますから少しお休みなされませ。」

ナレーター その時、野良着姿の人々が川の方へ血相変えて走って行きます。

村人1 「てえへんだ、てえへんだ。」

英子 「何事かあったのですか。」

村人1 「降蔵んちのこどもがおぼれただあ。」

ナレーター 英子は昌太郎を背負うと、その人たちの後を追って川へ向かいました。

川岸には、助け上げられたばかりの子供が横たわっていました。回りを囲んだ村人たちは、只おろおろするばかりです。英子はその子供の様子を一目見るなり。

英子 「何を見ているのです。早く手当をしないとこの子の命は危ないですよ。」

村人2 「だって、どうしたらいいかわかんねえだ。」

英子 「それでは、私におまかせください。さあ。昌太郎様をおぶってください。早く、手遅れになってしまいます。」

ナレーター 英子はいきなりその子をうつ伏せにしました。まず水を吐かせ、そして今で言う人工呼吸を始めました。

英子 「ギヤーギ、ギヤーギ、ギヤーギ。」

ナレーター 英子が唱えるまじないと、人工呼吸の手捌きに、村人たちは目を見張りました。しばらくすると、子供の顔に赤みが差してきました。

そして息を吹き返しました。

英子 「もう大丈夫です。」

村人1 「アー、よかった。生き返ったよー。」

村人2 「すげーなー、よかったよ、よかったよ。」

村人1 「ありがとうございます、助かりましただ。」

ナレーター 村人たちは口々に英子を誉めそやしたり、子供が息を吹き返したことに、喜びあつたりしていました。

子供の家は今宿村の大百姓でした。命の恩人の英子にお礼をしたいので、急ぐ旅でなかつたら、しばらく家に逗留して貰いたいと丁寧にお願ひしました。村人たちも是非そうしてもらいたいと懇願するのです。

英子は、目指してきた土地でもありませんでしたので、今宿での村人との出会いは土屋惣蔵殿や主人の導きであるかも知れないと、ありがたく好意を受けました。

次の日には、

村人1

「うちの子が、朝から腹が痛いといつてないでるだよ、腹痛も治せるか、だつたら治して下せえ。」

村人2

「喉が痛くてよー、何とかならねえだろうか。」

ナレーター

と、村人が来ました。この地方には医者はいない時代でした。病気で苦しむ人々を、いつか英子が診療するようになりました。その評判は広まって、近郷近在からの患者が絶えませんでしたので、村人と相談の上、近くの仏国寺という寺へ移ることにしました。

英子もこの地で女医として生涯を過ごすことにしました。昌太郎も仏国寺の住職から教育を受けることになりました。

月日も大分たち、村人とのふれあいも深まったある日、

英子

「私ももう若くはありません、これからは私のことを医者様とか先生様などと言わないで【オババ】と呼んで下さい。その方が私も気が楽ですから。」

ナレーター

それから、村人といっそう親しみを増していきました。夜となく、昼となく病人が出ると「はい、はい」と精力的に治療に努めました。「ギヤーギ、ギヤーギ。」と唱えながら……。寒くなると風邪の咳、喘息、百日咳と喉の病気が多くなりますが、英子は喉の病氣治療には自信があり、たいいていの人

が治り喜ばれました。長い月日がたち、英子もわが身の衰えを感じていました。

英子

「想庵殿、間もなく私は、お側へまいります。世のため、人のため、医者として悔いのない人生でした。昌太郎様は立派に成長されました。思い残すことはございません。」

ナレーター

村人は心配で、誰彼となく住まいを訪れていました。

ある日、「村の皆さん、お世話になりました。」と言って、英子は眠るように大往生を遂げました。

その後、近郷の人々は英子の徳を忍んでそれぞれの土地へ思い思いの形で「ギヤーギばあさん」という石像を建てました。

今宿村では仏国寺の境内へ建てました。この仏国寺は廃寺となり、現在の跡地の一角に大切に保存されています。大きき凡そ五〇センチ、有髪で羽織を着ている姿が、風化されてはいますがはっきり解ります。女の医者らしい感じがします。

芹沢村にありますのも、やはり五〇センチ位で、こちらは老婆の形で温かい感じが伝わってきます。

高田村のは、今では個人の屋敷内で大切に供養されています。

今でもひどい咳の人や、喘息の人が平癒祈願をしています。直ったときには、お手所に梅干しをのせて、お礼参りをしているようです。

いぼとり地蔵

ナレーター

昔々、行谷村の近くに親子三人の仲の良い百姓一家が住んでいました。子供は「およね」といって、十六歳の娘盛りです。年頃ですが、なかなか縁談がありません。およねは、手足や顔にいぼが沢山できていたのです。両親に心配されていることは気にしていても、あつげらんとしたものです。

「いいの、あてえはこんな顔だもの。」

「気だてのいい子だのに、かえーそーになー。」

「ほんとになー、働き者だしなー。」

ナレーター

村人は我がごとのように同情してくれました。

ある日のこと、村を一人の年老いた男が通りかかりました。村のはずれのお地蔵様の前まで来たとき、ぼったりと倒れてしまいました。村のはずれのお地蔵様を、ちょうど野良婦りのおよねが通りかかりました。

「アレ！ どうしたただよう、しつかりしな。」

ナレーター

およねは、抱き起こしました。

「これからどこまで行くのかよ。」

旅の人

「へえ、足の向くまま、気の向くままさあ。」

旅の人

およね 「いくらそうでも、むりじゃあねえのかよ。」

およね

「そうだ、しばらくあたいの家で養生していったら。家は親子三人きりだし

旅の人

何の気がねもねえ家だから。」

旅の人

「ねえさんは親切なお人だ、お言葉に甘えてしばらく休ませてくださいませ。」

ナレーター

年老いた男は、およねのやさしさに、しばらく厄介になることにしました。体が回復してきますと、二恩返しにと野良仕事を一生懸命手伝うようになりました。

村人1

「およねちゃんの家世話になっっている人はよく働くなあー。」

村人2

「なんでも、お地蔵さんのところで行き倒れになっただけを助けてもらったんだとよー。」

ナレーター

村人たちも温かく受け入れていました。この村に清造という若者が居りました。清造はおよねに好意を持ち心引かれていました。

清造

ある日、
「およねちゃん、おいらがよく知っている人がやっている湯治場が、できもんによく効くんだと、そこへ行ってみる気はねえか。」

およね 「ありがとう、でも野良があるから、とてもそんなことできねえ。」
旅の人 「そんなことなら大丈夫、わたしが野良仕事は手伝います。」
清造 「旅の人もあるってなさる。思い切って行ってみなよ。」

ナレーター

およねとて年頃です。あつげらかんと振る舞ってはいます、いぼのことはとても気にしていました。清造の思いがけない勧めで、湯治場へ行くことになりました。一回や二回の湯治場通いで直るわけがありません。お金と暇、長続きはしません。湯治場通いは心ならずもあきらめました。また、野良仕事に精を出す毎日です。

ある日のこと、お地藏様が倒されているではありませんか。

およね 「あれまー、どうしたことだんべえー。さあさあ、いま薬にしてあげますよ。」

ナレーター

およねの手で元の通り直しました。すると、お地藏様が、

「ありがとう、いたずら小僧に倒されてしまいました。おまえさんは、心の優しい娘さんだ。」

ナレーター

およねの耳に、小さな声で言われたのが聞こえました。

「こんな泥んこになられては気持ちが悪いでしようから、きれいにしてあげましょう。」

ナレーター

家から水を持ってきて、お地藏様を洗いました。お地藏様もにこにこ顔で喜んでいられる様でした。

二、三日して、新しい赤い頭巾とよだれ掛けもできました。お地藏様は見違えるほどきれいになりました。

地藏様

「いろいろありがとう。お札にいぼを取ってあげましょう。私の前にある小石を持ち帰り、いぼのところをなでるとだんだん取れて直るでしょう。」

ナレーター

およねは言われるままに、小石を一ついただいて帰りいぼをなでますと、
アーラ不思議、いぼはだんだんとれて、すっかり治りました。

およねは花を持ってお札に行きました。

およね

「お地藏様、ありがとうございました。こんなにきれいに治りました。」

ナレーター

と、顔をお地藏様に近づけたり、手でお地藏様をなでたりしていますと、

地藏様

「これからも人に親切な心がけなさい。勇気のあることですが、あなたならできます。誠の心は尊いものです。」

ナレーター

と聞こえました。家に帰りますと、今まで働いていた旅の人が見当たりません。あの旅の人はお地藏様のかりの姿だったのではないでしょうか。

いずれにしても、これからの長い人生を世のため人のため、できる限りのことをしようと胸が熱くなりました。

村人1

「およねちゃん、この頃めつぼうきれいになったナ。」

村人2

「なんでも、お地藏さんのおかげだと、およねちゃん言ってたよ。」

村人3

「お地藏さんが旅の人に姿を変えて、およねちゃんの前に現れたんじゃねえかと。」

村人2

「そうそう、そう言えばこの所、旅の人の姿が見えねーと思っていたのよ。」

村人3

「清造さんよ、早くおよねちゃんを嫁さんにしねーとだれかに取られてしまっよ。」

清造

「およねちゃん、おいらと所帯を持たねーか。野良仕事も一人でするより二人のほうが楽しいよう。」

およね

「あたいもずーっと前からそう思っていた。」

ナレーター

と言うことで、二人は所帯を持ち、いついつ迄も幸せに暮らしたということです。

およねのことが近郷近在の人たちの知るところとなり、このお地藏様は、「いぼ」は勿論のこと、子供を始め、病氣平癒の祈願をかける人が後を絶たず、お札の小石がうず高く積まれるようになり、行谷のいぼとり地藏、子育て地藏と呼ばれるようになりました。

姥島物語

ナレーター

伊豆の大島から柳島へ花嫁が輿入れしたときに、烏帽子岩とも呼ばれる姥島を嫁入り道具の一つとして持ってきたというお話です。

柳島は茅ヶ崎市の一番西南の方角にあるところで、南は相模湾です。西は相模川を境に平塚市須賀です。北は中島、松尾、東は南湖です。

大昔はこのような広いところにわずか一軒だけでしたが、だんだん戸数が増えて、河岸と本村の地区にまたがるようになりました。また、浜見平団地ができた、河岸も柳島海岸、本村も何丁目何番地という住居表示になりました。漁業と農業の地域が一躍住宅地となり、現在では、世帯数が急速にふえてきました。

昔は、相模川と松尾川が一つになって、相模湾にそそぐところで、柳島湊として、又数下の藤間湯治所、つまり温泉の里として大変栄えたところでした。柳島にしばらく徳右えんさまという大きな百姓屋がただ一軒だけありました。柳島を最初に開いた人です。その子孫にあたる徳右衛門はよく働く若者で、野良仕事の傍らには川や海に出て貝や魚を捕っていました。

大島の漁師の家に八重という美しい娘がおりました。年頃になるにつれて海のかなたに見える内地を大変あこがれるようになっていました。

ある日、八重が父の出船を手伝って帰ろうとしますと、浜辺に打ち上げられた雑多な流木と混じって若い男が打ち上げられていました。

八重が駆け寄って抱き起こしますと息は絶え絶えです。

八重

「ようー、おんぢえー、おんばえー来てくれよう。」

島の人1

「なあーしたよう……、おおこりやあ、ゆんべのあらしてやられたなあ。」

島の人2

「島のもんじやねえな。」

八重

「早くあてえの家へ運んでつてくれよ。」

島の人1

「よじきたつ。」

島の人2

「それつ、しつかりしんだあよ。」

ナレーター

もともと元気な若者でしたから、二、三日もするとすっかり元の体になりました。

徳右衛門

「おかげでいのちびろいしただあー、ありがとう。」

八重

「あんたが運がよかつたからだよ。」

徳右衛門

「俺れあ、柳島というところの者で、徳右衛門というだあ。」

八重

「じやあ、あの白い土蔵の……。」

徳右衛門

「うん、あの日はちーと天気が悪いなあと思ひながら、つい油断しちゃつて漁に出たもんで……、ほんとうならおだぶつになつてたんだけよ。」

八重

「元気になつてよかつたなあ。もういつでも家へ帰れるよ。」

徳右衛門

「八重さんよう、お礼のしるしといつては何だがよう、俺と一緒に柳島へ行かねえか。あつちこち見せてやんからな。」

八重

「うわあー、うれしい。」

徳右衛門

「うわあー、うれしい。」

八重

「うわあー、うれしい。」

ナレーター

八重は躍り上がつて喜びました。そして、家の船であこがれの内地へと渡りました。

八重

「あてえの思つていたとおり。内地は良いなあ。」

ナレーター

日が経つのも忘れてしまい、そのうちに野良仕事をぼつぼつ手伝い始めました。徳右衛門は、八重を命の恩人というばかりでなく、氣だてのいいその人柄にすっかり惚れ込んでしまいました。そして、ある日思い切つて、

徳右衛門

「八重さん、あつかましい事だがなあ、俺の女房になつてもらええかなあ。」

八重

「あらつー、あてえみてえな者をよ。」

徳右衛門

「いやいやとんでもねえ。承知してもらえれば、こんなありがてえことはねえだよ。」

八重

「うん、家へかえつて親にも話してみねえと。」

ナレーター

八重はもう幸せいっぱいの思ひでした。この縁談はほとんど拍子に運びました。だが八重の両親は、大百姓屋へ嫁ぐのだから、それ相応の嫁入り道具に頭を悩ませました。

八重の父

「八重よ、島ならどうだ。」

八重

八重の父

八重

八重の父

八重

八重の父

「エー、島？」

「あの、烏帽子の岩だよ。」

「でも、烏帽子の岩はご先祖様からの宝物だから……。」

「う、うん、でもあれなら先方さんに恥ずかしいことはねえだろう。」

「そう……、とつちやん、ありがとう。」

「あの岩のように末永く幸せになあー。」

ナレーター

こうして八重は立派な嫁入り道具とともに暗れて徳右衛門へ嫁ぎました。証文は明治の中頃まで立派な朱塗りの箱に納められ藤間家に伝えられていたそうです。

しばきり徳右えんさまでは現在も子孫の藤間善良さんが徳右えんさんという屋号で柳島の発展とともに益々栄えておられます。

烏帽子岩はやがて、周辺に平島を生み、西側に長者安兵岩、長者蔵島、島島、大小の鯖島などを生み、東側に江戸島、尾之棟島、鳥頭島、ばらあら島、平磯、ウ島等を生みました。そしていつか姥島と呼ばれるようになりました。

江戸末期のこと、相模湾一帯は伊豆の代官、江川太郎左衛門の支配下にあり、その配下の者たちが、

「姥島は伊豆のものである」と言い出し、「いや相模のものだ」と主張する地元との対立が始まったとき、

小和田村に

「相模なる、小和田が浦の姥島は、だれを待つやらひとりねをする。」

と刻まれた、作者不明の歌の碑が発見され、これによって姥島は相模の國のものという事になりました。現在この歌碑は、小和田の熊野神社境内にあります。

この姥島は、姥島諸島と言って三〇数個の小島からなり、その広さは東西へ五五〇メートル、南北へ四〇〇メートルの面積で、一番高いのは烏帽子岩で、水面から十五メートル程あります。海岸からの距離は直線でおよそ三キロです。周辺は、魚や海草の宝庫で春になると、ヒジキやワカメがたくさん採れます。魚も季節によって鯖、白ギス、ソーダカツオ、黒鯛、鰯等近海物が、いつでも誰にでもたやすく釣れます。海岸には観光の釣り宿も六、七軒あります。平島、姥島への渡し船も出ています。

茅ヶ崎の海岸から真南に見える大島にも、乳ヶ崎と言うところがあります。何か縁があるのでしようか。



えな塚物語

ナレーター

頃は、永暦元年（一一六〇）伊豆の姪が小島・流人の配所に監禁されて、読経と写経に明け暮れる一人の少年が居りました。比較的短身、小太り、頭の大きい体格で、風采はまあまあながら、その陰に備わる気品の良さ。この少年こそ源義朝の嫡男、十四歳になった頼朝です。

父義朝は、平治の乱で平家に敗れ、頼朝も殺害されるところを、池ノ禰尼の熱心な計らいで、一命をとりとめ、この伊豆に流人の身となっておりました。配所の持仏堂の頼朝は、仏に仕える日課を一日も欠かさない程でした。やがて、十二年の月日が流れて、頼朝は、二十六歳となりました。貴公子の風格は、一段と増し、りりしい青年になっておりました。

乳母、比丘尼の姪に、厚子と言う娘がいました。めつきり年老いた比丘尼の代わりに十八歳になるこの厚子を、頼朝の侍女としたのです。同時に、尼の長女の婿、武蔵国の武士、安達盛長も頼朝の傍に仕え、常に忠勤に励みました。

厚子は、容姿端麗で心優しい女性でした。侍女として仕えたことに誇りを持ち、一生懸命つくしました。

ある日のこと、庭の草取りをしている厚子に、頼朝は声を掛けました。

頼朝

「ときに、そなたに話したいことがあるので、いつでもよいかから母屋に来てくれぬか。」

ナレーター

改まった頼朝の言葉に、何事であろうかと、翌日、母屋を訪れました。話
は、思いもかけぬことでした。

頼朝 「そなた、わしの妻になつて欲しいのだ。」

厚子 「えっ、ほほ……また冗談を。」

「いいや、わしは、とつづくに心に決めていたのだ。そなたのような聡明な女性こそ、頼朝には必要だと……。それについてももう一つ、そなただけに打ち明けておきたい大事なことがあるのだ。実は、源氏の再興を決意いたしましたのだ。文覚上人を始め源氏ゆかりの武将たちが、しきりに旗揚げせよと提言して参るのだ。それには、先ず妻をめとわれよとのう。」

厚子 「そのような大事、よく打ち明けて下されました。でも、身に余るお言葉、私ごとき者が……。」

頼朝 「そなたをみこしての頼みじや、是非、承知いたしてくれ。今すぐとは申

さぬ、何れ比丘尼に承諾を得なければならぬし。」

厚子 「ありがたきお言葉、その時がまいりましたら、身を粉にして妻の努めを果たします。」

ナレーター

無論、比丘尼やその一族も、光榮の事と大変な喜びようでした。厚子は、将来に希望を持って一層、頼朝に尽くしました。

しかし、この約束は、頼朝には運びませんでした。

ある時、伊豆の東海岸、伊東の地に館を構える豪族、伊東祐親の娘と恋

に落ち、なんと二人の間には、千鶴と呼ぶ男子まで生まれたのでした。だが、これを知った父、祐親は、平家への闇こえを恐れて、千鶴を川に沈めた上、頼朝まで亡き者にしようとして謀ったので、頼朝はあやうく走湯権現に逃れ、一命をとりめたのでした。

安元元年(一一七五)頼朝二十九歳の頃でした。

祐親の手を逃れて間もなく、頼朝の前に現れたのは、北条時政の長女政子でした。なんと二人は、結ばれてしまったのです。このことを知った時政も平家一門への恐れから強く反対しました。しかし、気丈で強い女性だった政子は、ある夜の事、監禁されていた一室からひそかに抜け出し、豪雨の中、夜どおし山坂を越えて、いっさんに頼朝の元へ走りしました。時政は、其の心情にほだされてこの結婚を認めたのです。

治承元年(一一七七)頼朝三十一歳、政子二十一歳の時でした。

頼朝の度重なる女性関係は、固い約束を交わした厚子にとつて、心中をかきむしられる悲しみでした。しかし、厚子は、これ程の出来事にも耐える事の出来る賢く、強い女性だったのです。じつと、我慢の筋を通しました。

さて、色々と艶聞が伊豆の人々に噂されながらも、さすがに頼朝は大人物でした。著々と源氏再興の旗揚げの準備を進めておりました。遂に、後白河法皇の皇子、以仁王の令旨をとりつけ、治承四年(一一八〇)八月、平家打倒の兵をあげたのです。しかし、戦は厳しく、頼朝の軍勢は、もろくも総崩れとなり悲惨なものでした。頼朝は、数人の家来と共に、石橋山山中へと逃げ込んだのです。

この頃、三島神社で一心に頼朝の無事を祈願する一人の女性がおりました。

厚子

た。厚子でした。

「何卒、殿様の御命、救わせ賜え、私の一命を捧げて、御願ひ奉ります。」

ナレーター

命を賭けた悲願が通じてか、三島神社の靈験はあらたかでした。真鶴の洞穴に潜んでいた頼朝主従は、梶原景時の機知もあって救われたのでした。この付近の豪族土肥実平の導きで、真鶴から小船に乗り、海路を安房へと逃れました。まもなく鎌倉に磐石の地を備える事が出来ました。

政子も、そして厚子も鎌倉入りをしました。政子の勢力は強く、正室となり、厚子は側室となりました。しかし、厚子は丹後の局と改名し、頼朝はひたすら厚子を愛し続けたのです。丹後の局は、やがて懐妊しました。

月を重ねるうちに、大政所政子の知るところとなり、政子は、すぐに丹後の局を殺害しようと企みました。それを察した頼朝、丹後の局をひそかに鎌倉から、茅ヶ崎の西久保に、桜屋敷を新築して、そこに逃がしました。

そのうち、月満ちて、局は玉のような男子を産みました。その赤ん坊の胞衣(えな)を、小出川に近い田んぼの小高い所に収め、塚をたてて男子の無事を祈り、「えな塚」と呼びました。桜屋敷は、この塚の地続きにありました。産後のひだちもよく、局の男子は三郎と名づけられました。丹後の局は、更に政子より逃れるようにして、西久保を後に、京都の惟宗公に嫁入りをし、三郎もその家で養われ成長しました。

三郎七歳の時、母と供に鎌倉に来て、鶴岡八幡宮社前で頼朝と親子の対

面を果たし、三郎改め忠久と名乗ることになりました。

その後忠久は、島津荘総地頭に任ぜられ、建久八年（一一九七）、薩摩、鹿兒島の大隅、官崎の日向の三国の守護職を兼任しました。

そして、この忠久こそ、九州の有力な武家一族として繁栄した島津氏の始まりの人だったのであります。

「えな塚」は、今でも、茅ヶ崎西久保にあり、現在『旧跡・懐島山』とも呼ばれて、そこには、高さ130センチ、横幅70センチほどの切り石の碑が建てられ、えな塚の伝承が詳しく書かれています。

胞衣（えな）を埋めた時、その上に植えられたと言う松の株は、側室でありながら、その死を迎える時まで、夫と子供を思い続けた厚子の心が宿ったかのように、今もなお、地中に残っているとこの事です。



えびす講

ナレーター

昔、東海道ぞいに、商人の街と、漁師の街が隣り合わせでありました。漁師街は、年中豊漁で景気がよく、栄えていました。それに引き替え、商人のほうは、さっぱり繁盛しません。青菜に塩の有様でした。そこで商人達は寄り合いを開いて南壳繁盛の知恵を絞りました。

「俺達は、商ねえがちつとも振るわねえ、漁師はどうしてああ景気がいいのかなあ。」

商人2 「だって魚が一年中うんと取れんもんよ。」

南こう屋 「そのことよ、漁師は、羨ましいほど意まれてらあな。」

商人3 「なんか、いいおまじねえでもねえもんかなあ。」

商人1 「うーん、おまじねえか……。あつ、解かった。」

商人2 「えっ！いきなり、でけえ声出してびっくりしんじやねえかよ。」

商人3 「何が解かったんだよう。」

商人1 「神社、神社、お宮さんだよ。そしてほれ、えびす様だよ。」

南こう屋 「お宮さんと、えびす様？ それがいつてえどうしたってんだよ。」

商人1 「ほらつ、漁師は、カケオーを竜宮様や、お宮へ、しよつちゅうあげてるじゃあねえかよ。」

商人2 「そう言われてみりやあ、それに違えねえが。」

カケオーとは、漁が特別たくさんあったとき、漁師二人して、一つのおかめ籠へ取れたての小魚を一杯入れて、ヤオー、ヤオーと威勢のよい声で走りながら氏神様や八大龍王社へ供えるのが、この地方の習慣になっています。つまり神への感謝、信仰の現れであります。

漁師1 「大漁だ、大漁だ。」

漁師2 「早く籠にに入れて出掛けべえ。」

商人1 「ヤオー、ヤオー。」

商人2 「ほーら、噂をしりやあ影とやら、カケオーが聞こえてきたよ。」

漁師1 「ヤオー、ヤオー。」

商人1 「やっぱりカケオーは、景気がいいなあ。」

漁師2 「ヤオー、ヤオー。」

南こう屋 「今日も大漁だったんだなあ。」

漁師1 「ヤオー、ヤオー。」

商人2 「ホラ、みんな神社のほうへ行くよ。」

「なあ感心してねえで、肝心なことを考えようよ。カケオーばかりでなく漁師たちは、竜宮様の祭礼を年二度もやるし、そのたんびに、お神楽を奉納して、上げえ賑やかだよ、前座のえびす様の鯛釣りが、またいいしなあ。」

南こう屋 「こいつあ、漁師を見習って神様を信心しなくちゃあ。」

商人3 「そうだなあ、えびす様を俺達ほもつと信仰しなくちゃあ。」

商人2 「どこの家でもえびす様は、他の神様とまつてはあんけん、一年に一度

ただ家だけで供え物をするぐれえだもんな。」

南こう屋 「俺達も行くべーかよ。」

商人3 「へえー、長えこと兵庫の西宮神社へも行ってねえし。」

「大阪の今宮恵比寿神社。京都の恵比寿神社の十日恵比寿へ来年は参詣に行くべえかよ。」

商人2 「そうだなー。」

この寄り合いは、思いがけずとんとん拍子に、恵比寿神社へ参詣にまで発展して終わりました。

さて、その夜のこと、えびす様が商人の代表格南こう屋の夢枕に立たれ、

「はるばる京都、大阪まで出向くには、費用その他諸々大変なことである。皆の家にまつてある神々へ真心をもって礼拝を怠らなければ、それでよいのじゃ。そして肝心なことは、商人はお客様を大切にすることである。商売繁盛を願うなら、先ずお客様を神様と思ひ、お客様は何を一番喜ばれるか色々工夫して尽くすこと。これが商売繁盛の道である。」

と、お告げがありました。

朝になって南こう屋は、もう一度皆に集まってもらい、昨夜の恵比寿様のお告げを話しました。一同も納得がゆき、相談の結果とりあえず一年間の「一歳風を感謝して、毎年十一月二十日を一斉にえびす様の日と定めて、値引

きの品の売り出しや、蜜柑、甘酒を一般の人々に振る舞う行事が始まりました。

以来、この商人の街は年々栄えてきました。



オチヨばんば

ナレーター

昔、茅ヶ崎円蔵村に丁覚院というお寺があり、一五〇坪ほどの敷地内にお堂があって、その堂守りで「オチヨばんば」と呼ばれている老婆がいました。この老婆は、ふとした縁で円蔵に住み堂守りとなりました。庚申様を熱心に信仰する人だったので、庚申塔や地藏様、道祖神などをとても大切にしています。

子供達がいたずらをしていると「オチヨばんば」の大声がします。

「こら！ お前たちはまたいたずらをしている、だめじゃないか。」

「ウワー！ おこりんぼばんばあが来たぞ。」

「庚申様を大切にしないと、罰が当たるから。」

「おこりんぼばんばあの雷だ、逃げる逃げる。」

ナレーター

いつもこうして叱られているので「オチヨばんば」は子供たちから、

「おこりんぼばんば」と呼ばれていました。だが村人からは「オチヨばんばのおかげで心強い。」と、たいそう頼りにされていました。

村人1 「子供がひきつけちゃたんだあ、おねげえします。」

村人2 「ばあさまが腹痛で苦しんでんだあ、頼む、来てけらっせえ。」

ナレーター 夜となく昼となく、この様なことはしょっちゅうでした。ある晩のこと、

庚申様 「オチヨサン、オチヨサン。」

ナレーター 村人とは違った声が表戸を叩きました。戸を開けますと一匹の猿が立っていました。そしてこう言うのです。

庚申様 「神明大神宮で旅人らしい男が倒れています。助けてやってください。」

オチヨ 「はて？はい、はい。」

庚申様 「夜分すみませんが、旅の人は疲れきった様子、どうか頼みます。」

オチヨ 「はい。わかりました。すぐ行きます。」

ナレーター

外へ出ると、今の猿がお宮のほうへ向かっていくのが月明かりで分かりました。途中にある庚申塔の辺りでふっと見えなくなっていました。アレ！と思いましたが、お宮の方が気になりますのでそのまま急ぎました。これは庚申様のお告げだったので。拝殿のところに、精根つきた男の人がうつ伏せになって倒れていました。

オチヨ 「しっかりとしないよ、サツ、立ってみなされ疲れているだけじゃ、そうそう気を張って。私の家はすぐそこだから、がんばって、それしっかりと肩につかま

りなさい。」

ナレーター

こういう時のオチヨばんばの態度は歳を感じさせませんでした。オチヨばんばの介抱はゆきとどき、三日ほどで旅人は元気になりました。

旅の人 「大変お世話になりました。この御恩、決して忘れません。ありがとうございます。」

ナレーター

旅人は心からお礼を述べて出立しました。それから数ヶ月後、商家の主人風の人がお堂を訪れました。

旅人 「私はいつぞや神明大神宮のところで倒れていたのを助けていただいた者

です。お陰様で、無事役目を果たすことができました。詳しいことは申しませんが出来ませんが、殿様始め沢山の人が救われました。あなた様のことを聞かれた殿様が、失礼ですが、堂守りをしていられる身分の方なら、一生お世話をさせていただきますので、わが領地へお越し願えないものかと申しつかつて参りました。」

オチヨ

「ありがたいお言葉ですが、私はこの地を離れたくありません。円蔵の人は皆いい人で、ここで一生終えることが望みなのです。」

旅人 「今すぐとは申しません。考えておいてくださいませんか？」

オチヨ 「でも、私の心は変わらないと思います。どうぞ、殿様にそうお伝え下さいませよう。」

ナレーター と、お断りしましたので、残念ですがと帰っていきました。円蔵の人々に心から愛され、そして円蔵を愛したオチヨばんばは「堂守りが何より。」と満足でした。

子供たちの悪たれ、

子供12 「おこりんぼばんばあ、おこりんぼばんばあ、ヤーイ、ヤーイ。」

ナレーター

そうしたことが可愛くて仕様がなかったのです。

こうして月日は流れ、オチヨばんばも百歳に近くなり、寝たり起きたりの日々となりました。

ある日、うたた寝の夢の中で、庚申様と語り合いました。

庚申様

「あなたも良い歳となりましたな、これからは私と一緒に暮らしましょうよ。」

オチヨ 「まあまあ庚申様ありがたいことでございます。私は幸せ者です。どうかよろしくお願いします。」

ナレーター

その時、村人が見舞いに来ましたので、ハッと目を覚ましました。

村人3

「やあ、ばんばあ、気分はどうだ。」

オチヨ

「はい、おかげで……、ああ丁度よいところへ見えられた。実は近々私は庚申様と一緒に暮らすことになりました。」

村人3

「そんなこと冗談でもいいついなし。」

ばんばあにやまだまだ長生きしてもらわなくちゃあ。」

「はい。そう言ったださるの嬉しいですが、でも私はもう歳ですから、

そこで、村の皆さんに只一つだけお願いしておきたいのは、私をこの地へ葬っていただきたいことです。」

ナレーター

そして数日後、沢山の村人に看取られて、安らかに天寿を全うしました。

そして遺言通り、丁覚院の一角に葬られました。

天保六年七月、高橋文右エ門が代表者となり、オチヨばんばの供養碑を建て供養しました。

その場所は野良道に面していましたので、子供がその供養碑にふれると「オコリ」の病にかかってしまい、親がお詫びしますと病はびたりと治りました。

付近には源頼朝の御家人の一人懐島景能が治承四年(一一八〇)に建保元年(一一二二)の間、館を構えていたので歴史上の遺跡も沢山あります。

又、「かつば徳利」の民話や茅ヶ崎市の重要無形文化財「円蔵祭りばやし」などゆかりがある地域です。

香川義民伝 三橋勘重郎

ナレーター

今からおよそ、200年ほど昔、明和から天明年間の頃、香川村に三橋勘重郎という名主がおりました。家族は、おかみさんと八歳になる女の子、六歳の男の子とそれはそれは平和な暮らしでした。勘重郎は、人の面倒見がよく、四十歳の若さで立派に名主を務めていました。

農家にとって、作物の出来具合は天候が決め手です。適当に晴天が続き、おしめりがあり、嵐がなければよいのですが、なかなかそうはゆきません。特に、米作りには、初夏の頃から夏にかけて水は欠くことができません。

日照りが続くと、農村では雨乞い祈願とか、水争いの騒ぎがよく起きました。香川村は、近くに川がありませんので、雨水だけが頼りでした。

勘重郎は村人の悩みを何とか解決したいと思いました。そして、用水路を思いつきましたが、領主の違う下寺尾から水をもらおうという事は並大抵なことではありません。何度も頼んだ末、漸く話がまとまりました。

村人1 「よかつたなあ、水がもらえて。」

村人2 「これからは水の苦勞をしなくて済むなあ。」

村人1 「これも名主様のおかげだ。」

村人3 「この村の田畑は、作物がよくできる様になるべえ。」

ナレーター

豊年満作が続くようになった香川村も、全国的凶作に見舞われてしまい

ました。世に言う天明の飢饉です。農家は食べ物がなくなり、草の根や、犬や猫までも食べて飢えをしのぎました。香川村でも日増しに食べ物がなくなってきました。

幕府は容赦なく年貢を取り立て百姓に追い打ちをかけるようでした。

村人3 「領主様は血も涙もねえのかよ。」

村人2 「いくらおかみの言いつけだってあんまりだ。」

村人1 「こんな時ぐれえ、年貢をまけてくれたっていいじゃあねえか。」

村人3 「俺たちだって人間だ、飢死になんかしてたまるもんか。」

村人1 「飢死にするくれえなら、領主様だって誰だっただじゃあおかねえ。」

村人全員 「そうだ、そうだ、そうだあ。」

ナレーター

勘重郎はだんだん殺気立ってくる村人の群集心理が心配になってきました。もしものことがあってはならないと、夜となく昼となく村中を回って村人の様子に気を配っていました。

この村に留吉、銀という百姓夫婦が居ました。留吉は半身不随で、長いこと寝たつきりでした。おかみさんの銀が、近所の人に助けられながら細々と野良仕事をしてきました。この大飢饉は、留吉夫婦にとってはいつそう厳しいことでした。もはや餓死寸前の状態に追い込まれていました。たまたま村を回っていた勘重郎はついでに留吉を見舞ってやろうと表の戸に手をかけた。とたん、留吉夫婦の唯ならない声が耳に入りました。

留吉

「頼むから殺してくれ。」

留吉

「そんなこと、とんでもねえっていつてんじゃねえかよ。」

留吉

「自分で死ぬことも出来ねえ、こんな殺潰しやあ、もういきちやあいられねえ。」

留吉

「駄目だったら、駄目じゃあねえかよ。気丈なお前さんが何よう。」

留吉

「年貢の金も品も何もねえんじやあ、死ぬのを待つばかりだ。」

留吉

「だからと言ってさあ。」

留吉

「俺はもう、元の体になれねえ。」

留吉

「そんなあ。」

留吉

「お前を幸せにもできねえ、意気地なした。さんざあお世話になったなあ、有り難うよ、さあお銀ひと思いにやってくれ。」

留吉

「悪かったよ、お前さんの気持ちもわからねえで、正直いつてあたしも疲れ

留吉

た。いつまで続くのかこの不作にやもう耐えられねえ。お前さん、私も一緒に

留吉

に行くよ。」

留吉

「そいつはいけねえ。」

留吉

「夫婦はどこまでも一緒だ。」

留吉

「ご先祖様には申しわけねえが、じゃあ一緒に……………」

留吉

「あの世でご先祖様にお詫びしようよ。」

留吉

「お銀……………」

留吉

「お前さん……………」

留吉

「留吉さん。待った、待った。早まっちゃいけねえ。」

留吉

「名主様、後生だ。止めねえでけらっせえ。」

留吉

「名主様……………」

勘重郎

銀

ナレーター

「いいや、困ってんのはお前さんとこだけじゃあねえ、みんな苦しんでんだ。私が命にかけても何とかするから、今少し頑張ってくれ。なあ留吉さん、お銀さんよう。」

「名主様あー。」

勘重郎は胸が張りさけるようでした。ああ、村人の苦しみはどうとうこゝ迄来たかと。ついに、村人のお上に対する怒りが固まり、実力で反抗しようとして立ち上がりました。近辺の村々にもこの気配は広がりました。全国で起きた百姓一揆です。これを一番恐れた幕府は、既に明和六年に『百姓強訴処罰令』をだして百姓一揆を防いでいました。もし香川村が一揆を起せば、村人全部が罪人となって処刑されることになりました。

勘重郎は、はやる村人を懸命に説得しました。そして自ら領主や奉行所へ出向いて年貢の延期やさらに食料の払い下げを繰り返し嘆願しましたが、この訴えは取り上げてもらえませんでした。

勘重郎は、もはや直訴以外にないと只一人江戸へ向かい、直訴を決行し、捕われの身となってしまいました。其上、百姓一揆をけしかけた疑いによつて拷問にかけられました。「竹筒指折り」といって、両手の指に竹筒をはめ、毎日一本づつへしおる拷問です。

一本、二本と指は折られてゆきますが、あくまでも村人をかばい続け真実を白状しません。

とうとう九本目が折られ十本目になった時、

本間平三郎 「勘重郎、痛いであろう、白伏せい。」

ナレーター 役人から言われたとき、

勘重郎 「糞食らえ！」

ナレーター

絶叫して意識がなくなりました。

やがて意識を回復した勘重郎は、直訴の罪と、百姓一揆の煽動者として、香川村東山と言うところで処刑されました。

だが、初七日の晩から領主本間平三郎の枕辺に夜な夜な勘重郎の亡霊が現れました。

勘重郎 「一本、二本、三本、四本、五……………」

本間平三郎 「うぐぐん、うぐぐん、うぐぐん、あ、あつ、勘重郎すまん。」

勘重郎 「六本、七本、八本、九本……………、糞食らえ。」

本間平三郎 「あ、あ、あううぐぐん、勘重郎許せ。」

ナレーター

こうして本間平三郎は毎晩悩まされました。本間平三郎はこのことを村人に話し、勘重郎の霊を慰めるため、自ら発起人となり、また村人が総施主となって、淨心寺の境内へ供養碑を立ててねんごろに供養をしました。

時、寛政五年三月でした。この碑の前に、残されたおかみさん、子供がいづまでもいつまでもぬかずき、そして、それから毎日のようにお詣りをす

る姿に村人の涙をいっそう誘いました。

さて、領主本間平三郎は、本当は非常に物分かりのよい人でしたが、領主という立場上、勘重郎の嘆願をかたくなに抑えていたのでした。

本間平三郎 「よし、わしが勘重郎に代わって、」

ナレーター

その後、熱心に幕府へ勘重郎の意思を伝えました。

流石の幕府も勘重郎の義侠に打たれ、直ちに年貢の延期、食料の配布などいろいろ飢餓対策を始めました。

こうして香川の村人は救われました。またその後、幕府は、農業へ深い理解を持つようになりました。今でも、勘重郎が作った用水路を勘重郎堀りと言つて、名残りをとどめている所があります。

香川は茅ヶ崎の西北部で、北は下寺尾と堤、東は松風台、甘沼、南は鶴ヶ台、西久保、西は寒川町大曲の地区に囲まれたところです。

大昔は、僅かな農家が、見渡す限りの畑と田圃の中にぼつんとあった程度でしたが、現在はずっかり住宅が立ち並び、ことに相模線香川駅が出来てからは一段と開けて、都市化が進んでいます。



かつば徳利

ナレーター

今から三〇〇年ほど昔のこと、茅ヶ崎西久保村に五良兵衛、おたつという夫婦がいました。

五良兵衛は野良仕事の合間に大山詣での荷を運ぶ馬方もする働き者でした。

今日は、一日中馬方の仕事をしたので「青」の汗を流してやろうと赤池へ入りました。

五良兵衛

「青や、今日も一日ご苦労だったなあ。見ろや、きれいな夕焼けだあー。この分じやあしたも忙しいぞ、しつかり頼むぜ。」

ナレーター

せつせと「青」の体を洗っていると、突然――

五良兵衛

「青、これ青どうした、これ！」

ナレーター

一生懸命なだめながらよくよく見ると大変！、カッパが「青」のお尻へ噛みついていてはなりませんか。

五良兵衛

「うわあー、こりやあ、えれえこったあー、だ、誰か助けてくれえー。」

村人1

「オーイ、五良兵衛さん、何かあったのかー。」

村人2

「どうしたのようー、びっくりしんじやあねえかよう。」

五良兵衛

「カッパだ、カッパだよ。」

村人3

「えー！カッパだつて。」

村人1

「おーほんとだ、カッパだー。」

村人2

「青にくらいついてんようー。」

村人3

「いま助けてやんから、青よしつかりしろよー。」

村人1

「この野郎、この野郎。」

村人2

「やっちめえ、やっちめえ。」

村人3

「こんちくしょう、こんちくしょう。」

ナレーター

ふだんカッパに悪さをされ、まして子供などは命にかかわる危害を受けているので、村人はこのときとばかり、手にした鎌や鋤で、カッパを打ちのめして青から引き離し、取り押さえてしまいました。

五良兵衛

「ああ助かった、みんなあー、ありがとうよ、ありがとうよ。」

村人1

「なあに、いつかはやつつけなきやあ、と思ってたんだ、ちようど良かったよ。」

村人2

「さあーで、こいつどうしべえかよ。」

村人3

「ぶつ殺してやりてえが、そうもいかねえしなあ。」

村人2

「じゃー、土手のあのどっかい木へ縛り付けちまったら？」

村人1

「うん、ひとまずそうしべえ。」

ナレーター

というところで、カツバは土手の大きな木に縛り付けられてしまいました。陸へ上がったカツバと言いますが、全くそのとおり、水の中にいるときの元気はなく、見るも哀れな姿で身動きもできません。

五良兵衛が家へ帰りますと、女房のおたつが出迎えました。

おたつ

「お帰んなせえ、赤池で大変でしたなあ。」

五良兵衛

「おお、びっくりしたのなんのって、青がかええそうだな、でもみんなが近くにいたので良かったよ。」

おたつ

「青も疲れてんとこを、とんだ災難だったなあ。」

ナレーター

おたつは「青」のたてがみをなでながら、馬小屋へつなぎ、飼い葉を与えていつものようにねぎらいました。

五良兵衛は早々と床に入りましたが、昼間のカツバのことが気になってなかなか寝つかれません。

おたつ

「あのカツバは、子供がいくたりかありそうな風だったなあ。」

五良兵衛

「そうなんだ、やつらにや、しよつちゆう悪さをされてんから、今度こそ敵討ちのつもりで、みんなは、ひとまず木へくり付けただが、あのしよんぼりした姿を思い出すとふびんになってきちゃったよ。」

おたつ

「なあお前さん……。あのカツバ助けてやったら。」

五良兵衛

「なにつ……、そいつはできねえ。」

おたつ

「でもあのカツバ……本当に子供があつたとしたら……。」

五良兵衛

「うーん。」

おたつ

「なあー、もしもよ、あたしの勘が当たったら、かええそうじゃねえの。」

五良兵衛

「そうだなあー、村の者にやあ、あした話して分かってもらおう。」

ナレーター

五良兵衛は心が決まりましたので、夜道を土手の木のところへ来ますと、カツバはしくしく泣いています。

五良兵衛

「これカツバ、悪いことばかりしんから、こんな目にあうんだ。」

カツバ

「わーん、わーん。」

五良兵衛

「あしたになりやあ殺されちまあだぞ。」

カツバ

「わーん、わーん。」

五良兵衛

「もう二度と悪さはしねえか。」

カツバ

「はい、もう決して悪いことはしませんから縄を解いてください。家には孫が二人もおつて、きのうから、馬の尻こたまをくいてえ、キュウリがくいてえつて泣いとるもんで……。つい。」

五良兵衛

「そうか、そんなら助けてやんべえ、孫にはなんの罪もねえからなあ、縄を解いてやるが今度やったら頭の皿をたたき割ってやんからな。約束したぞ。そうでねえと、おれは村の衆に顔向け出来ねえからな。」

ナレーター

五良兵衛はカツバの縄をとりやりました。カツバはうれし涙をぼろぼろ流し、首をびよこびよこ下げながら川のなかへ帰っていきました。

草木も眠る。その夜更けのこと……………。

カッパ

「五良兵衛さん、五良兵衛さん。」

五良兵衛

「はて、この夜更けに誰だんべえ。あれ！」

ナレーター

外に立っているのは、闇夜でも昼間のカッパであることがすぐ分かりました。

五良兵衛

「やっべえしー、お前か。」

カッパ

「はい、先ほど助けていただいた間門川のカッパですが、お礼に上がりました。夜が明けちまうと、村の者にめっかるんでやってきましただ。

この徳利はなんてことのおねえような徳利ですが、底さえたかねば酒はなんぼでも出てきます。だども、底を3回叩くと酒はとまっちゃいます。どうか良いあんばいに使ってくださいませまし。」

ナレーター

と云って闇のなかへ消え去りました。

さて一番鶏の鳴く声で目がさめ、おたつが雨戸を開けると、

軒先に薄黒く丸っこい徳利が置いてあるではありませんか。

おたつ

「お前さん、起きてよ、変な徳利がここにあんよ。」

五良兵衛

「なにっー、変な物？どれどれ、あれっー、こりやあ、ゆんべカッパがくれた徳利だ。うん夢じゃあなかつたんだ。」

ナレーター

五良兵衛は女房に昨夜カッパが来て、この徳利は酌めども酌めども酒が出てくるのだと云って、命を助けてもらったお札に置いていったのだと話しました。

おたつ

「なに馬鹿なこと云ってんのよう、とんでもねえ、気味の悪い話じゃねえかよ。酒だといったって中身はカッパのオシッコだが何だか知れたもんじゃあねえ、飲んじやだめたよ、こんな徳利、うっちゃやっちゃまっせえよ。」

ナレーター

五良兵衛は良く働くけれど、酒も大好きでした。そのまま女房にはないしよで戸棚にしまっておきました。

ある日、女房の留守を見計らって、恐る恐るこの徳利の酒を飲んでみました。ところが！この酒の旨いこと、旨いこと。それに酌めども酌めども酒は出てくるではありませんか。

五良兵衛

「うへー、こりやあすげえや。」

ナレーター

もう子供のように大喜び。

それからというもの、働きの変わり方は想像以上でした。

五良兵衛

「ういー、ああ、こりやこりや、たにしことごと、みやまの、まちへいかねえか、いやなことごと、去年もいって、ゆでられた。ああ、こりやこりやと。」

ナレーター

ま、こんな調子で全然田や畑へは出ないし、馬方の仕事もしません。朝から晩まで酒浸り。

村人2

「おたつさんや、五良兵衛さんは、酒のとりこかよ。まだ野良へ出てこねえじゃねえかよ。」

村人3

「カッパを助けてやったは良いけど、情けがけえって仇になっちやったなあ。」

おたつ

「そうなんだよう。お前さん！田や畑はどうしんだよう、取り入れは過ぎちまうし、草はぼうぼうで、手をつけられなくなっちまうじゃねえかよ。」

「でえいち大山へお参りのお客さんにすまねえよ、阿夫利神社の罰が当たったつてしらねえからな。」

ナレーター

いかにおしどり夫婦と評判のおたつも、とうとう金切り声を上げての意見に、ようやく五良兵衛、目が覚めたかのようですが、カッパのくれた徳利の酒は酌めども酌めども出てくるのでどうにも始末がつきません。おたつはもう五良兵衛を責める気力もなくなりました。むしろ「青」が哀れになってきました。

おたつ

「なあ青や、お前だつて、めえーんち、めえーんち何にもしねえで、小屋ん中へとじこもつていたんじゃあ、つまらなかんべえ。でえいち体がなまっちまつて困るんじゃねえか。」

青

「ひひーん、全く親方にもあきれたもんだ。これじゃ、おかみさんが心配してくんなさるように俺やあ体がなまっちやあだよー。ああ働きてえー。」

おたつ

親方！目を覚ましてください。悪いのはカッパの野郎だ。酒の徳利さえくれないさや、親方は怠けもんにならなかつたによ。」

「何とかして、あの徳利から酒が出てこなくなる手だてはねえかなあ。」

「そうだ！尻をねらうカッパということに気がつかなかった、カッパは尻にかかりがあつたつて。よーし、あの徳利の尻をひっぱたいてみんべえ。」

ナレーター

徳利を逆さにして、そこをトン、トン、トン三回叩きました。

おたつ

「ありやあ、出ねえ、出ねえ、何も出ねえよ。やったあ、やったあ。お前さん酒が出なくなつたよう。」

ナレーター

おたつの勘が当たつて、それっきり酒は出なくなり、ようやく五良兵衛は、村一番の働き者に戻りました。

その後、間門川や赤池では、カッパの被害が全くなりませんでした。

この徳利は昭和五〇年代まで、市内円蔵の故小室由さん宅で大切に保存されていましたが、現在は静岡県にある小室さんの親戚に保存されています。

この徳利の由来を記した碑が円蔵の輪光寺に建っています。



狐を化かした魚屋

ナレーター

本村の西北、千の川のほとりの田んぼの中に、島状の、「牛の御前」という森があつて、祠がありました。

そこには男前のきつねの親分が住んでいましたので、赤羽根山から女狐がいつも遊びに来ていました。

その場所は、南湖の魚屋が荷を担いで、茅ヶ崎の北部方面の芹沢、もつと遠く八王子の方へ商いに往来する道でした。

そこを朝早く、或いは日暮れて通ると、狐に魚をとられたり、お姫様に化けた狐に惑わされたりしました。ある人は一晩中、森や田圃の中を巡つて夜が明けてしまったそうです。

今日も狐が集まつて何か相談をしています。

狐 1

「ねえ皆、そろそろ魚を食べたくなつたわね。」

狐 2

「でも川の魚なら飽きたわ。」

狐 3

「油揚げも食べ飽きたものね。」

狐 4

「あーら、こないだ豆腐屋からせしめたあれは、旨かつたじゃない。」

狐 5

「稻荷様が上がった油揚げは、確かに飽き飽きだわね。」

狐 6

「魚っていえば、この頃ポテーを見かけないね。」

狐 1

「海がナゲないと、ポテーは通らないし、私たち馳走にありつけないわね。」

ナレーター

ポテーとは浜で仕入れた新鮮な魚を遠方へ行商に行く魚屋のことを言います。

狐 4

「いつまでもシケが続くわけないわ。」

狐 3

「そろそろポテーが通るようになると思うわ。」

狐 5

「そうすれば魚にありつけるわね。」

狐 1

「だけど、この頃ポテーも賢くなつちやつて。」

狐 2

「化かして魚をせしめるのに骨が折れること。」

狐 6

「でもさあ、中には、ちよつとおつむの弱いポテーとか。」

狐 5

「そうそう、ほら、女好きとか。」

狐 4

「結構やすやす化かせるポテーもいるじゃない。」

狐 1

「そうねえ、そんなポテーを化かして。」

狐 3

「サバ、イワシばかりでなく。」

狐 2

「たまにはタイとかヒラメを食べたいわ。」

狐 6

「わあー、タイやヒラメねえ。」

狐 5

「盆と正月が一緒にきたみたいだわ。」

狐 1

「アツハハハ……。」

狐 同

「だけど、真面目な話さあ、暫くぶりにアジでもイワシでも良いから魚にありつけないかねえ。」

狐 4

「ほら、幸造とかいうポテー。」

狐 3

「いつかあつさり化かしちやつて、こつそりサバを頂いちゃった。」

狐2

「そう、あの孝造を狙おうよ。」

ナレーター

幸造と言うボデーは、狐達の話題になっている、とても女好きの中年男で、前の田の道は必ず通ります。海もナゲとなりボデーも通るようになりました。

狐達の望みが叶うチャンスが訪れたようです。

またまた、狐達が集まってきました。

狐6

「ようやく魚を食べられる時がきたようね。ところで誰か若い女に化けてくれる。」

「私とその役引き受けるわ。皆の中で私が一番きれいなもの。」

「まあ、よく言うわね。」

まず幸造を、ボーとさせてしまえば良いのでしょうか。」

「私は幸造が担いでいる天秤棒にぶら下がって、荷を重くする役をするわ。」

「私は幸造が荷が重くなつちやつて下ろしたすきを狙うわ。」

「私は下ろしたその籠から魚を頂だいちまう。」

「私も籠の中の魚を捕る役をするわ。」

ナレーター

次の日、幸造が久し振りに商いのため、この道を通りかかりました。待つてましたと、狐達は計画通り実行しました。

幸造の荷はあつという間に、狐達に奪われてしまいました。

幸造

「ちくしょう、狐に化かされちゃった。」

ナレーター

気が付いたときは後の祭り、どこをどう歩いたのか何と空の籠を担いで、わが家の前に立っていました。

幸造

「よーし、この敵はきつととつてやる。ボデーの意地を見せてやんからな。今までさんざ仲間を悩ました恨みをきつと晴らしてやんから見えてろっ。」

ナレーター

それからと言うもの、幸造は敵討ちを色々考えました。

幸造

「こんだあ、こつちが化かしてやらあ。」

ナレーター

色々考えた末に、名案が浮かびました。

幸造

「ヒラメの腹へフグの毒を塗り付けて、中毒させてやらあ。だがよう、命に別状はねえように加減しといてやらあ。まあ見てろよ。」

ナレーター

そしてある日、幸造は仕組んだヒラメを沢山籠に入れて、狐達を油断させるため、ドドイツを鼻歌で唄いながら前の田の森の道へとやってきました。

幸造

「ドドイツあ野暮でもやり繰りや上手、今朝も七つ屋で寝められた。」



ナレーター

勝った、勝った。狐を化かしたのは俺くらいなもんだ。アツハハハ……」
 幸造は躍り上がって喜びました。その後、これに懲りた狐達は小出村の山へと移り、前の田辺りの狐の被害は全く聞かれなくなりしました。
 今では、千の川の流れも変わり「牛の御前」の森も祠もなくなり住宅に囲まれた、記念碑が立っているだけです。

ナレーター

狐1
狐2
狐3
狐4
狐5
幸造

「ウ……痛い。」
 「何かしこんだわね。」
 「しびれてきた。」
 「何か変だわ。」
 「痛い、痛い、痛い。」
 「どうだ、思い知ったか。苦しめ、苦しめ、これが天罰と言うもんだ。」

ナレーター

狐1
狐2
狐3
狐4
狐5
狐6
幸造

丸い卵も切りよじや四角、物も言いよで角が立つ、あッこりや、こりや。」
 「今日はポテーがいやにこ機嫌だこと。」
 「大漁だったんだよ、きつと。」
 「それにしても荷が少ないね。」
 「魚は今日は何だろうね。」
 「あらあー、ヒラメのようだわ。」
 「ヒラメ、ヒラメ、ヒラメ。」
 「食べたあい、食べたいと思っていたヒラメだわ。」
 狐達はヒラメに目を奪われ、素早く魚をとると一言に森へ駆け込みました。
 「うまくいったぞ、今にみてる。」

幸造は森のはずれにひそんで狐達の様子を伺っていました。魚に飢えていた狐達は争ってヒラメを食べはじめました。がフグの中毒はてきめんでした。